

## 土・水の研究と私たちの健康な生活に関するシンポジウム

農業環境技術研究所が主催する第25回土・水研究会『土・水の研究と私たちの健康な生活』が2月20日つくば農林ホールにおいて開催されました。参加者は、政府機関、都道府県、民間企業、大学、独立行政法人などから合計で148名でした。

陽 捷行氏（北里大学）の講演では、20世紀の科学技術の検証と反省に基づいて「農・環境・医の連携」を目指した21世紀の新しい科学の潮流が述べられ、さらに北里大学が実施中のいくつかの新しい試みが紹介されました。幅広い角度から今後の科学技術のあり方を見つめ直す内容で、インパクトのある講演でした。

田村憲司氏（筑波大学）の講演は、環境教育としての「土壌教育」の重要性を訴えた内容で、その理念および既に実施されてきた「土壌の観察会」の様子が写真などで詳しく紹介されました。かけがえのない自然資源としての土壌について、地域・学校・家庭が連携しながら理解を深めてゆくことの必要性が強調され、示唆に富んだ内容でした。

登坂ユカ氏（いばらき園芸療法研究会）の講演では、園芸という本来は農業分野の活動を医療という別の分野で活用する試みが紹介されました。園芸療法の歴

史、定義、海外と国内の活動の流れが述べられ、多くのケーススタディが紹介されました。

渡部 裕氏（喜多方市教育委員会）の講演では、「喜多方市小学校農業科」について、基本的な考え方などが述べられ、具体的な指導内容が写真などで紹介されました。「なすことによって学ぶ」という、現在の教育が見落としがちなテーマに挑戦し、土や作物にふれながら農業体験をする教育の成果が期待されます。

阿部 薫氏（農業環境技術研究所）の講演では、農村地域の水質保全について生活排水、畜産排水や園芸排水の浄化について、バイオジオフィルターや現在実施中の研究について紹介されました。これらは植物を利用した環境にやさしい浄化技術であり、今後の普及が期待されます。

川崎 晃氏（農業環境技術研究所）の講演では、土壌中の微量元素や微量放射性物質の存在比の分析から農産物の産地を判別する技術が紹介されました。産地偽装の問題が昨今のニュースを賑わせており、産地を判別する技術が注目されています。米についてはほぼ技術が確立されていますが、野菜その他の農産物については、さらなる研究の進展が期待されています。

（土壌環境研究領域長 小野 信一）

## 第24回気象環境研究会 「2007年夏季異常高温が水稲生産に及ぼした影響を検証する」

平成20年2月27日、第24回気象環境研究会が農環研において開催されました。埼玉県熊谷市と岐阜県多治見市で日本の最高気温を更新する40.9℃を記録するなど、昨年8月～9月は日本の広い範囲で異常高温に見舞われました。こうした異常高温は、これまで室内実験から予測されていた高温不稔が起りうる温度域にありました。そこで、農環研は、作物研究所や中央農業総合研究センターの研究者とともに緊急調査を行い、上記研究会でその結果を報告しました。研究会には、ほとんどの都道府県の研究者を含め行政部局、企業、大学など所外から133名、所内から32名、計165名が参加しました。

研究会では、関東・東海の多くの地域で7月下旬から8月上旬に出穂、開花をむかえていたこと、当所で開発したモデルによる推定では、水田が広がる農村地域の気温や穂温及び水稲群落の温度がそれほど高くなかったことから、今年の作況に大きな影響はなかったことが報告されました。また、品質についても、乳

白米などの品質低下はあまり見られなかったことが報告されました。

一方、最高気温を記録した時期に出穂、開花した水稲に注目すると、場所によっては籾に実がならない不稔の発生が20%を超えていたことが報告されました。また、不稔については品種や施肥量が、品質については日射量や蒸散量が大きく影響していることも指摘されました。

このように、今回の緊急調査から高温が水稲生産へ及ぼす影響とその対策を考える貴重な情報を得ることができました。



（研究コーディネータ 今川 俊明）